

マンドリンがつなぐ 福祉と国際交流



音色に惚れて…
マンドリン人生

肥沼 成明さん (鎌倉市ボランティア連絡協議会会員)

日本マンドリン連盟本部理事・関谷在住)

マンドリンの世界では、日本でも第一級のお一人である。演奏家で指揮者、そして後進を導く指導者でもある。

著名な文学者で、マンドリンの愛好家でもあった萩原朔太郎が、こんな逸話を残している。『音色が何とも言えないのです。ちょうど熟した果物が、ある日、耐えかねたようにポーンと弾ける。そんな時の感覚でしょうか』

肥沼(こいぬま)さんのマンドリンとの出会いは、そんな絶妙な音の響きに魅せられたからであった。

朔太郎の表現はまさに言い得て妙だった。「震えるようなあの独特なトレモロもそうですよね。しかも明るく太陽のような音の色つや。日本人の特質ともいえる豊かな感受性に訴えかける。他の楽器ではそうそう真似が出来ません」。10代のころにマンドリンと触れ合い、今年77歳になる肥沼さんの、67年間「人生イコールマンドリン」だった理由は、ここにある。

カンツォーネに欠かせないように、マンドリンが発達した故郷はイタリア。ハ

ンガリーからチェコ、ロシアを回ってバラライカが生まれる。一方、西アジアから中国に入って、日本では琵琶がその親戚にあたるが、素性は似ていても音色は異なるもの。

ヨーロッパで発達してきたにもかかわらず、マンドリンは不思議なことにドイツ以外に欧州では日の目を見ず、現在、マンドリンの愛好家が多かったのは、日本、オーストラリアだと言われる。

「ドイツと日本、オーストラリアが三大国といわれています。バイオリンなどと比べ、とても難度の高い楽器で、しかも値段も高い。何より日本人にあった音色、器用で感受性の高さが楽器に求められているゆえ」と、肥沼さんは見る。

トレモロ淋し…古賀メロディがフィット

数多くの名曲を残した故古賀正男さん。明治大学マンドリンクラブを創設したことでも知られる。弦をはじいて音を出す撥弦楽器は、左右の手を繊細に、かつ激しく操作する。曲が難しくなればなるほど、難度は極めて高い。

そんななかでも、古賀メロディーの「影を慕いて」などの名曲には、マンドリンがぴったりくる。トレモロの音色は手先で弦をきわめて繊細に、また素早く動かすことで、心や人の気持ちの奥深くに迫る。

「だから日本人にぴったりくる音色になるんですよ。琴線に触れるとでも言うんでしょうか。外国人は黒白はっきりしないとだめ。その点日本人は一種の曖昧さと言うか、中間的なものを受け入れ、大事にする気質がもともとある。これも日本で普及した大きな要因でしょうね」。

川崎の呉服商の四男として生まれる。厳格な父親で、音楽などは無縁の人だったが、「趣味の世界に生きた兄」が、どういうわけか終戦間もないころ、すでにマンドリンを弾いていて、楽器が家にあった。「古賀さんとも親交があったようで、父親も半ばあきらめ顔」。そんな兄のマンドリンを当時10歳の肥沼さんが、見よう見まねで弾く。いつしか地元で評判になり、子どもながら川崎マンドリン合奏団員になったのが、マンドリン人生のスタートだった。



父親の「芸などで身を立てるな。実業に生きろ」、ということもあり、元々福祉に強い関心を持っていたこともあって、川崎市役所に勤める。お役人時代もずっと福祉部門で働く。30歳になって間もない頃、日本マンドリン連盟が主催する関東地区のマンドリン独奏コンクールで上位成績をおさめた。功労が評価され川崎市の文化賞も受賞するなど、マンドリンの腕前は関係者から高い評価を受けていた。

宮内庁で洋楽の伝統を受け継ぐ、オルケストラ・シンホニカタケイや地元の神奈川県フィルハーモニー等からも招請を受け、独奏やオーケストラでも腕の冴えを見せた。社会人になった後、マンドリンで身を立てることも頭をよぎるが、やはり、福祉とマンドリンの2足のわらじを選んだ。

演奏活動 海外含め 575 回に



「土曜、日曜は全てマンドリンでした。家族には迷惑もかけましたが、仕事の手を抜くわけにもいきません。休日のすべてはマンドリンに費やしました」。

国内での演奏活動はもとより、イタリア、フランス、スペイン、スウェーデン、ハンガリー、ドイツ、ロシア、オーストラリアなど海外で20回もの演奏会を開く。昨年末

までの指揮、演奏の活動回数は実に575回にも及ぶ。

日本人の愛好者が世界でもトップクラスと言われても、やはりギターやバイオリン、ピアノ等に比べるとマイナーな存在でもある。まず楽器が高いこと。ピンからキリととっても、バイオリンと比べても倍近く値段が違う。

それと、音量が小さいので大舞台では、マイクなどの仕掛けが必要。どうしても「小さいサロンや、家庭の中で奏でることが中心の楽器」としての制約はつくが、現役を退いて以降は、マンドリン普及のための指導者として、役割がさらに増す。

仕事を離れた現在は、平日に鎌倉女子大、東経大、玉縄中学などの指導講師、地元にある大船、鎌倉、玉縄等でのマンドリン研究会を主宰したりする。

また、役所勤務の大半を、福祉に携わってきたこともあり、「マンドリンの素晴らしい音色を聴いてもらって、心の安らぎやぬくもりを感じてもらえれば」と、地元を中心に養護施設や老人施設などでの演奏にも、骨身を惜しまない。

鎌倉生涯学習センターのホールを使って、「第 28 回マンドリン定期演奏会」も 5 月の連休の最中に開くほか、大船まつりライブ、玉縄フェスティバルでも定期演奏を行い、タクトを取ったり自身ソロ演奏するなど、マンドリン人生そのままの日々である。

ご家族との合同演奏も

さぞや、奥さまご家族から恨み節でも、と思われるが、奥さまもマンドリンをこよなく愛し、ご子息とはむずかしい楽曲である A・ビバルディ作曲「2 つのソロマンドリンコンチェルト」を観客の前で合奏する。いつの間にか、肥沼さんのマンドリン人生に引きずり込まれた格好。



昭和 10 年生まれで、間もなく 77 歳。同 35 年に東京経済大学を卒業、在学中にはマンドリンクラブを創設、現在も OB 会会長。

川崎市役所に奉職後も、時には本来の仕事の外に、マンドリン演奏の業務依頼もある等、実力は広く知られていた。川崎市からの文化賞もそんな活動が認められてのことだった。

昭和 50 年に、川崎からきれいな空気を求めて、現在の鎌倉市・関谷に移り住む。平成 17 年に鎌倉市政功労賞、翌年県社会福祉協議会会長表彰等を受ける。

